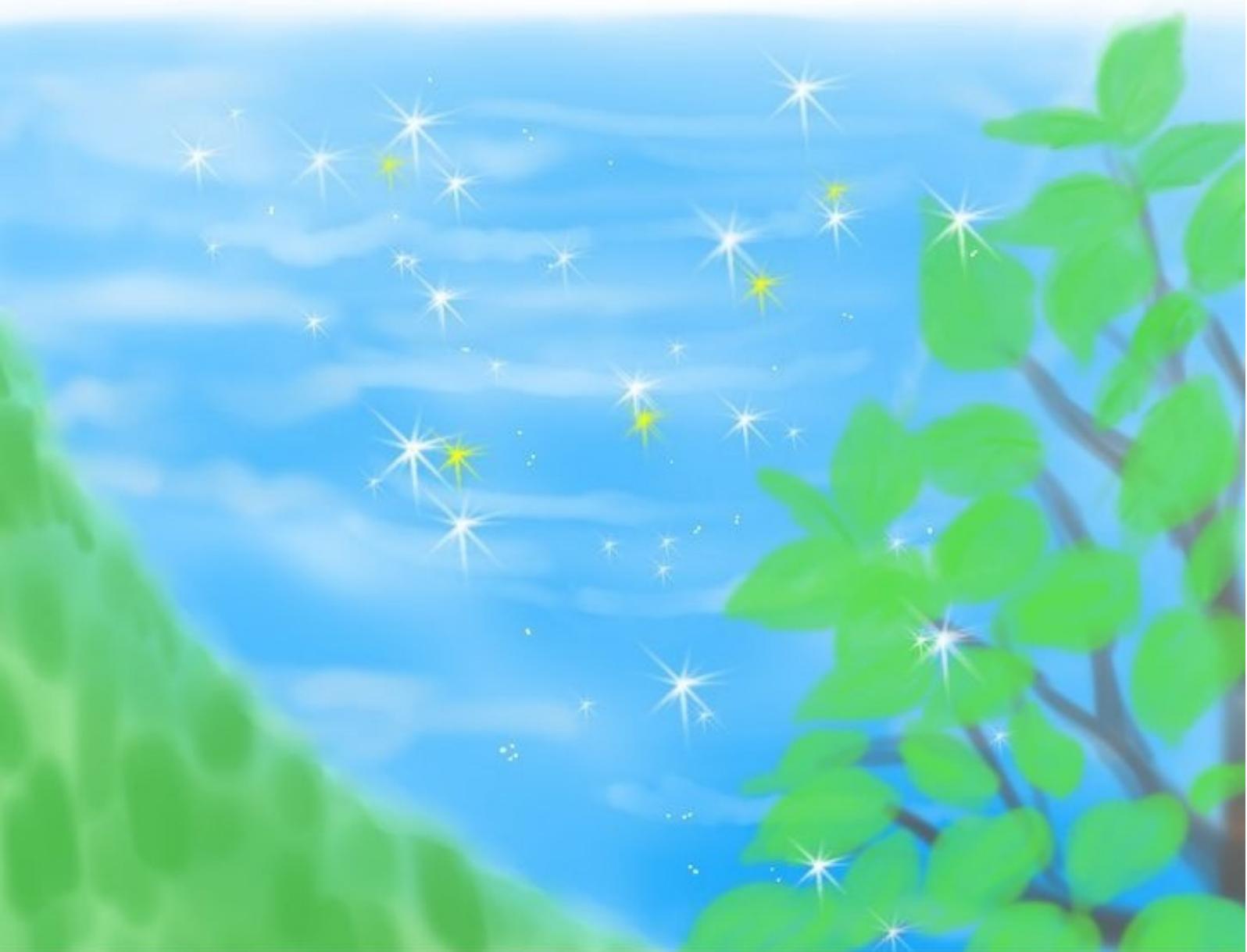


きらきら



ジヴ.T

きらきら

1、

電車は、岬のトンネルと海を交互にサチの目に映しながら、早春の海岸沿いを過ぎていく。トンネルから抜けた海のきらめきに、サチは言い知れぬ生きている喜びを感じていた。

さっきまで降っていた雨の雫をつけた櫂の葉が、風にゆれながら、日の光をきらきらと病室のベッドにいるサチに送っていた。

「おはよう、目覚めたかい」母はそういいながらサチの顔を覗きこんだ。

「手術、成功したからね。よかったね。あと少しだからね、もう少しがんばろうね。」サチは、ただ、櫂の葉から送られる、きらきらとした光を見ながら、もうろうとした意識の中で、ゆっくりうなずいた。

「この手紙をあなたが読んでくれているということは、僕の人生は終わりあなたは生き延びることが出来ているということですね。

幸運なんだと思います。

僕はドナーカードを書くにあたって迷いました。僕が脳死になった際、僕の体が誰かの役にたつのであれば使ってほしいと思います。でも、僕は悲しいかな人間嫌いなんです。狡賢い人、思いやり、優しさを持たない大人達が、なぜこんなに多いんでしょう。僕は、あなたがそういう人でない事を願います。」

サチは、小さな港町の駅で、電車を降りた。

ホームに立つと、山側はみかん畑が広がり、そのまだ奥には、山の斜面に別荘らしき家が数軒点在し、そして真っ青な空。

乗ってきた電車が過ぎると、駅前の道が緩やかに下り小さな集落の中に消えていく、小さな集落は小さな入り江を囲み、そのむこうに細波に日の光が反射して、きらきら輝く海が見えた。

春の暖かな海風がほほを掠めていく。

サチはバックから小さな紙切れを取りだし、駅前を海に向かって歩き始めた。

みかん畑は徐々に少なくなり、小さな野菜畑が多くなり、民家がぼつりぼつり。

「あの一すいません」サチは畑にいたおばあさんに声をかけた。

「は い。・・・なんでしょう」

「この辺に、浜中さんと言うお宅はありませんか？」

「は い。・・・はまなか・・・下の名前は？、この辺は浜中多いからね。下の名前じゃないと分からないからね。」

「そうですか。・・・二年ほど前に亡くなられたんですが、孝一さんと言う方のご家族に逢いたいのですが。ご存知でしょうか？」

「二年前に...はまなかこういち...すまないねー...年だねー、...この先にスーパーがあるから、そこで聞いてくれ、配達もするからそこなら知っていると思うよ。すまないねー、年だねー...。」

「はい、わかりました。ありがとうございました。」

サチは深く頭を下げ、また、海に向かって歩き始めた。

畑が途切れ、集落に入った最初の道を左へ入った3軒目に、スーパー浜中があった。サチの住んでいる町のスーパーと比べると小さなお店だった。

近づくたびに改装したばかりらしく、外も中も明るくきれいだった。

店の前に、女性店員と近所のおばあちゃんらしき人が話をしていて、サチはゆっくり歩き、話が終わるのを待って、女性店員に声をかけた。

「あの一、すいません。この人の家を探しているんですが、ご存知でしょうか。」

そう言ってサチは紙切れを渡した。

「コウイチ・・・いくつぐらいの人。」

「わかりません。ただ2年ほど前に亡くなっていると思います。ご家族に会いたいんです。」

「ああ、そう・・・、そのお宅は、この道をそこの山の麓まで行くとT字路にぶつかるから、それを右に、山側2軒目の家。大きなびわの木が入口にあるから、すぐに分かります。」

そう言うと、店員は紙切れをサチに返し、掃除を始めた。

「そうですか、ありがとうございます。」サチは笑顔でお礼を言った。

「それから、そこのうちは、幸さんと言う初老のおばあさんの一人暮らしだよ。」

「さちさん、・・・そうですか、一人暮らしですか、・・・分かりました、ありがとうございます。」

「・・・で、あなたは？」女性店員は、掃除を止めてサチの顔をじっと見た。

「はい、コウイチさんに命を救われまして、お礼が言いたくて……」

「そっ、すぐわかるわ。大きなびわの木があるから」

そう言いながら、店員はまた掃除を始めた。

サチはお礼をいい、教えられた道を山の方に歩き始めた。

(あなたのお母さんは私と同じ名前なのね)

山の麓に向かって10分ほど歩くと、T字路にぶつかり右へ、さらに数分歩くと大きな  
びわの木と、その奥に瓦屋根の古い民家が見えた。

サチは自分に言い聞かせた。（お母さんは悲しませない様にするは、私はあなたのことが  
知りたいの。）

となりの家の生垣と、びわの木の間の道を入ると、その家があり、広い庭とその海側に小さな畑  
が作られていた。

玄関の前に立ったサチは、胸に手を当て、ひとつ深呼吸をして声をかけた。

「ごめんください」

何の返答も無い。

もう一度玄関に向かって声をかけた。

「ごめんください」

すると、家の山側から一人の初老の女性が出てきて「どちらさまですか」と言った。

「はい、山田 幸（サチ）といます。えーと、あの一・・あの一こちらはハマナカ コウイチさんのお宅でしょうか？」

「孝一の知り合いですか」

「はい、あー、いえ・・・」サチは落ち着こうと右胸に手を当てた。

「孝一は2年前に死にましたよ。交通事故で」

サチは、右胸手を当てたまま深呼吸をし、「はい、知っています。・・あの一、これを」と言  
って、バックの中から封筒を出して幸さんに渡した。

幸さんは封筒から便箋を出して黙って読んだ。

そして、読み終わると黙って封筒にしまい、サチに手渡した。

「そうですか、あなたが・・・」

「はい、・・・すいません。・・・私は孝一さんのおかげで生き長らえました。」

「謝る事はないのよ。これは、孝一が望んだ事なんだから。それにしても孝一らしいわ。

ね、お茶入れてくるから、そこに座ってて」幸さんは、縁側を見てそう言うと、家の中へ入っ  
ていった。

サチは少しほっとしていた。ドナーの家族に会いに行くと言ったとき、周囲の人たちは  
恨まれるとか、お金を要求されるとか言って、やめた方がいいと言われた。

しかし、サチは孝一からの手紙を読んで、そういう人たちの中で育った人とは思えなかった。

「はい、どうぞ」幸さんは縁側の障子を開け、座布団とお茶ののったお盆を持って出てきて、  
サチに座布団をまわし、お茶ののったお盆を間に置いた。

「良く探したわねー、大変だったでしょ。」

「はい、いろいろな方法で半年ほど掛かりました。」

「体のほうはもう大丈夫なの？」

「はい、薬は手放せませんが、無理さえしなければ普通に生活できます。」

「そう、それはよかったわ。孝一もきっと喜んでいるわ。」

「私、この手紙渡されたの、先生にもう大丈夫でしょうと言われた少し後でした。

コーディネーターだった人にドナーからです、（移植患者が元気になったら  
渡してください）と書かれてありましたと言われて渡されました。戸惑っていると、コー  
ディネーターの人が（大丈夫、手紙は確認させていただきました。ドナーの方の素直な気  
持ちは書かれているだけです）と言われ、読みました。

何かとても穏やかな気持ちになりました。……もしよかったら、孝一さんのことを話していただけますか？」

「そうですか、孝一らしいわ。……サチさんなら良いでしょう。ちょっと待っててくださいね。」そう言って幸さんは、部屋の奥へ入っていった。

少しして戻ってきた幸さんは、「幸一の部屋そのままにしてあるので、どうぞ」と言って、サチを奥の海側の角の部屋に案内してくれた。

部屋は日当たりが良く、海も山も見えた。

ベットと窓際に机、その上に数冊の本とCDラジカセが置いてあった。そして、その横の壁には、ポスターや写真が数枚貼ってあるだけの、さっぱりした部屋だった。

写真は旅行先で撮ったらしく、バイクと共に男女が映っていて、女性の方はさっき道を聞いたスーパーの女性だった。

「この写真が孝一さんですか？」

「そう」

「女性の方は。……さっき道を教えていただきました。」

「そう。幼なじみ、小 中 高と同じ学校、よく二人で旅に行っていたわ。孝一は将来を考えていたんじゃないかしら……………さっきの手紙は、その机の引出しに入っていたの

……………机の一番下の引き出し開けてみて、小さい頃からのアルバムがあるでしょう。」

サチが引き出しを開けてみると、カメラと共に2冊のアルバムがあった。机の上に取り出すと、幸さんが近づいて「椅子にどうぞ。」言い、自身は机の前の出窓に腰を下ろした。

「これが、生まれてから高校ぐらいまでのアルバム。もう一つが自分でカメラを買ってから撮った写真みたい。」

サチはゆっくり小さい頃のアルバムをめくった。笑みを浮かべた家族の写真が、たくさんそこにあった。

「これがお父さんですか。」

「そう。孝一が7歳の時に海で死んでしまったわ。それからは、親一人子一人。」

「……………ごめんなさい。」サチは、来たことを少し後悔した。

「あ、ごめんね。……………いいのよ。3日間泣き続けたわ。悲しいけど、これが孝一と私の運命ね。」そう言うと幸さんは、ゆっくり じっくり、アルバムをめくりながら、孝一さんの小さい頃からの話をした。

幸さんの話は、穏やかで優しく、とても息子を愛していた事が伝わるものだった。

サチは、話を聞きながら、幸さんの穏やかな顔 声、アルバムの写真、部屋の様子、窓からの景色を見ているうちに、孝一さんが、サチをここに連れて来たのではないだろうかと、感じてきていた。

見るもの聞くものが、今までのサチには感じたことのない様な、懐かしさを感じるためだった。

サチが感じていた通り、孝一さんは、優しく思いやりがある人で、常に相手のことを考える人だそうです。そして、その母もまた、優しく思いやりのある人で、孝一さんが死んだとき、優しい母をここまで支えてきたのが、孝一さんの幼馴染、サチに道を教えてくれたスーパーの女性、有紀であるとの事こと。

優しい人々の中で、孝一さんは育ったという事が、幸さんの話からとても伝わってきた。



サチがお墓にお参りしたいと言うと、幸さんは「すぐそこだから」と案内してくれた。

お墓は、自宅の山側に2分ほど歩いたところにあった。

墓石はきれいに洗ってあり、たくさんのお花がそなえたうえに、墓の周りの地面にも植えてもあった。

サチが「綺麗にしておりますね」と言うと、幸さんは「もう、私にできることは、これだけだから」とほほ笑んだ

サチは持ってきた花を供え、手を合わせ「大丈夫、あなたの嫌われるような大人にはならないわ。」と心の中でつぶやいた。サチが孝一さんに一番伝えたかったことだった。

墓参りを終え、幸さんの自宅前についた時、サチが「今日は、突然伺ったりしてすみませんでした。体の事もあるので、そろそろ帰ります」と伝えると、

幸さんはサチに近づき、両腕の上から抱きしめ、胸に耳を当てしばらくじっとしてから、ひとすじの涙を流しこう言った。

「孝一の心臓の音、・・・また、聞かせに来てくれるかい？」

「はい、喜んで.....また来させていただきます。この町も、幸さんの事も大好きになりました。」

あとがき

私は、臓器移植に詳しいわけではありません。本当に、脳死患者がよみがえることがないのであれば、臓器

移植で誰かが救われるべき、と思っているだけです。本文の孝一の、共に生きるという心が私の気持ちです。

私は日本人ですが、日本語の感性ある言葉が好きで、知識もないまま書いています。コメントいただけると幸いです。



きらきら

<http://p.booklog.jp/book/67045>

著者：ジヴ.T

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kacyakacya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67045>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67045>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ